

学位論文の要約

論文題目

中央アンデス高地でアルパカとともに生きる人びと：牧民村落の市場経済化と技術の変容

申請者 佃 麻美

論文要約

本論分は、中央アンデス高地のペルーにおいて、リヤマ・アルパカを主に飼養する牧畜民を対象とし、フィールドワークによる調査をもとに、グローバリゼーションの波にさらされるアンデス高地の牧畜民がいかにかに生計を立て生き抜いているか、その社会・経済的変動過程を民族誌的に記述し、分析を行うことを目的とする。

本論分は全9章で構成されている。章題は以下のとおりである。「第1章 序論」、「第2章 調査地概要」、「第3章 家畜を飼う生活」、「第4章 日帰り放牧と母子関係への介入」、「第5章 「遺伝的」改良の取り組み」、「第6章 家畜品評会と繁殖用家畜の取引」、「第7章 毛刈りとアルパカ毛をめぐる取引」、「第8章 資本主義と牧民村落の社会関係」、「第9章 グローバル化のなかで生きるアンデス牧畜民」。

第1章ではアンデス牧畜およびラテンアメリカ農村における市場経済化に関する先行研究を検討し、本稿の視座を述べた。

第2章では、調査地と調査対象の概要として、中央アンデス高地の環境、南米ラクダ科動物の特徴について記述した。またそのなかでも中心的な調査地であるP村と町Sの社会・経済的な状況を描き出し、P村の住民のほとんどがアルパカ・リヤマの飼養に関わっていること、町SがP村の住民にとって、子どもに教育を受けさせたり情報や日用品を入手するうえで重要な拠点であることを描いた。

第3章では、P村での牧民としての生活を具体的に描出した。家畜を飼養する1年の活動とそれに携わる家族構成、そして近年では雇われ牧夫の存在が重要となってきた状況について述べた。またアンデス牧畜の一つの特徴である定住性について、具体的なデータから確認した。

第4章では、牧畜という生業において重要な日帰り放牧や母子関係への介入において他地域と共通した特徴や管理技法がみられるかどうかを、具体的な事例から明らかにし、これまでの通説の妥当性を検討した。母子関係への介入は乳利用の開始にとって必要な技法であると谷(1997, 2010)は仮説を立てている。乳を利用しないことはアンデス牧畜におけるもう一つの特徴であるが、牧畜と認められてこなかった一つの要因でもあるため、これらの技法について検討することは、アンデス牧畜を牧畜という生業全体の中に位置づけるため

には不可欠である。結論を述べると、母子関係への介入など他地域と共通した管理技法がアンデス牧畜においても観察されることが明らかとなった。

第5章では、アルパカの「遺伝的」改良の実践について詳述した。アルパカの改良が推進される背景には、アルパカ毛の売却が現金収入を得るため牧民に重要になっているということ、またアルパカ毛が輸出品として重要になり、ペルーという国において重要な外貨獲得手段となっていること、そして貧困層とみなされている家畜飼養者たちの貧困改善対策としての側面を持っているということを確認したうえで、家畜の改良のためにとられている生殖管理には、バリエーションがあり、また地方行政のエージェントなどから科学的手法が教えられ、それを導入しているなかでも、民俗的知を語っていることが示された。

第6章では、前章で述べた品質改良を進めるうえで大きな役割を果たしている家畜品評会フェリアと繁殖用家畜の売買について述べた。フェリアに参加することには多大な労力と費用を要するが、ただ自身の家畜が品評される場であるというだけではなく、自身の改良の進捗度合いについて知り、品質改良について学ぶ場であり、さらに優秀な成績を収めることで繁殖用家畜として生体個体を売買するための宣伝媒体としても利用される。すなわち、フェリアには当然ながら、改良を進めたい牧民が集まっており、フェリアで賞に入るような牧民の良質なアルパカを改良（繁殖）用に買い求める機会となり得るのだ。繁殖用として生体のアルパカを売ることは、毛や肉を売るよりも、また品質改良用ではなく生体を売るよりも、かなりの高値がつく。ここに牧民にとって品質改良をすることのメリットがある。品評会で勝つことが重要な要素となってくるため、品評会に出されるようなアルパカは、牧民にとって特別な存在となり、個体名をつけられる。しかし、これは他の牧畜文化でも見られる、家畜が「個性性」をもつということとは対極の「商品化」である。品評会に出品されるアルパカが牧民にとって重要なのは、あくまで「高値がつく」という「商品」としての価値があるということなのだ。

第7章では、アルパカ毛の売買について考察した。繁殖用家畜は家畜の毛や肉を売るよりはるかに高値で売買できるが、生殖管理の仕方を変えたり品評会に参加したりすることは、これまでの章で見てきた通り、多大な労力と費用を要する実践であり、繁殖用家畜の売買で大きな利益をあげられるのは、現在のところごく一部の牧民にとどまっている。そうではない牧民にとって、今でもアルパカ毛の売却が大きな収入源となっている。第5章からみてきたアルパカ品質改良の実践は、ペルーにとって重要な輸出品であるアルパカ毛の品質を良くすることが大きな目的である。しかしながら、品質ではなく重量で毛の取引がなされているために、毛の品質を良くする動機づけがないことが問題視されていた。近年、始まっている品質による毛の買取の取り組みを、生産者が公正な報酬を受け取る取り組みとみなすことで、フェアトレード運動のなかに位置づけることで考察した。今でも仲買人に毛を売却する人びとは多いが、毛の価格は年により大きく変動し、仲買人への不満や不信感を牧民は抱いていることを具体的な事例から示した。その上で、品質により毛を買いとるアソシエーションと協同組合の活動について描出した。しかしながら、これらの活動も全ての人に支持さ

れているわけではなく、新たな不公平感や不信感が引き起こされていること、牧民たちは仲買人への売却という販売ルートも排除することなく、それぞれがおかれた状況に応じて、ときには複数の販売ルートを組み合わせながら最適な選択をしようとしていることを描いた。

第8章は、資本主義が牧民村落に入り込んでくるなか社会・経済関係が変化し、牧民のあいだに生まれる格差とそこで生じる感情的軋轢にどう向き合っているかを、主に人びとの語りから描出した。そこで見られたのは妬みの語りである。なかでも成功して土地や多くの家畜を手に入れた人に対しては、インカ時代の金を掘り返したのだという語り流布している。インカ帝国というこの地に特有の歴史や超自然的存在（アプ）、また合理的な説明を織り交ぜながら、少しずつ違うバリエーションが語られている。共通するのは、このようにして手に入れた富には大きな代償を支払う必要があるということである。これらの語りはタウシグが報告するコロンビアの農民と悪魔の契約の話（Taussig 1980）と非常に類似しており、資本主義がある社会に入ってきたときの共通した反応とみなせる。このような妬みの語りが村落で広く語られることは、富を平準化する機能があるだろう。しかしながら、事例に出てきた富裕者が商人という半ば外部の人間であり、この規範の制約を強く受けないと可能性があること、また牧民たちも出稼ぎや教育の機会など生活の場が村落にとどまらず新しい場所で別の価値観に触れること、また鉱山開発などさまざまな形で否応なしに外部とつながっていくことを考えると、その機能は今後弱まっていくことが考えられる。

第9章ではこれまでの議論を振りかえったうえで、総合的な考察を行った。牧畜という生業全体におけるアンデス牧畜の位置づけについては、アルパカやリヤマといった家畜が生活様式を大きく規制しているという点についてはすでにさまざまな報告がある一方で、詳細な家畜管理技術については他地域ほどの蓄積がなかったことが問題であったが、本論文では詳細な参与観察をもとに牧畜という生業を成立させるうえで欠かすことのできない技術がアンデスにも存在することを確認した。またアンデス牧畜と市場経済化の影響については、家畜管理技術、生計のたてかた、社会関係といった生活全体に変容がもたらされていることを描出した。牧畜という生業に市場経済化が大きな影響をもたらしているのはアンデスに限らず世界中に見られる現象であり、本論分の議論を通して現代の牧畜について考察することが可能となる。